

参加しました!

ワーク&ライフ講座



堀江敦子社長のお誘いで、12月1日の「ワーク&ライフ講座～ベーシック研修」に参加。この日の参加者は約20人、うち男子学生が3人も。自己紹介から始まったが、大学も学部も学年もさまざま。ワーク&ライフ・インターンとして活動する学生たちが「ホントに可愛くて～」と、わが子のように子どもの様子を語る姿が印象的。つづいて、たっぷり時間をかけて、保育者としての役割・接し方、安全確保、子どもの発達過程などについて講義。みんな熱心にメモを取りながら聞いている。座学の後は実習の時間。グループに分かれて、おむつ替えと授乳の仕方を学んだ。応用編は「こんなときどうする?」という事例についてのグループ討議&発表。最後に難度の高いテストを受けて合格すると修了。

休憩時間に参加者にインタビューをお願いすると、みんな快く答えてくれた。大学4年のAさん(男子)は、新聞や就活関係の本を読んでスリールを知り講座に参加。放送局に就職が決まっているが、「子どもにスポーツを教えているお父さんをみるといいと思う。働き方を考えるのに講座はとても勉強になる」。

同じく大学4年のBさん(男子)は金融機関に内定。「その職場ではみんな夜遅くまで働いている。将来家庭を持ったときのイメージができればと参加した」。インターンを体験してわかったことは「保育園にお迎えに行って、ご飯を食べさせ、お風呂に入るところまでが僕の担当ですが、それを時間内にやるのが難しい。子どもが言うことをきいてくれないのが、こんなに大変だとは思わなかった。でも可愛いですよ」。

大学1年のCさん(女子)は知人の紹介で参加。良かったのは「受入れ家庭のお母さんにいろいろ話を聞けること。お仕事の話とか両立支援制度のこととか、とても勉強になります」。

大学2年のDさん(女子)は、就職をどう考えればいいのか悩み、働く女性を間近で見たいと参加した。4歳の双子の男の子がいる家庭に入っているが「すごく可愛い! 賢くて驚かされることばかりです」。働き方のイメージもつかめてきた。「働きながら子育てするのは大変だけど、インターンシップのようなサポートを利用すれば、両立しやすくなる。子どもは私たちが来るのを楽しみにしてくれている。親以外の方が子育てにかかわることは子どもにとってもいいことだと思います」。子どもをみる目は変わりましたか? という質問には「はい。電車の中で泣いている子を見てもすべて可愛いと思うようになりました」と答えてくれた。

「体験」するしかないと思いました。

「世代間交流」の機会にも

—それでワーク&ライフ・インターンシップを始めたのですね。

はい。学生を対象にしたワーク&ライフ・インターンシップ事業をやるかと決めて、2年前にスリール(株)を立ち上げました。目的は、学生たちが、子育て体験や働く先輩との交流を通して、自分らしい働き方や子育てを考え、当事者意識がもてるようになること。

実際に始めてみると、学生は子どもたちをわが子のように可愛く思い、お父さんもその日を心待ちにしてくれる。子どもが楽しんでいいるから、親も罪悪感を持つことなく、その時間を自分のブラッシュアップに使うことができる。お父さんやお母さんたちは、学生にとつて就職活動や恋愛の悩みを聞いてくれる人生の先輩であり、「世代間交流」の機会にもなっています。

インターンシップを経験して、いま社会人2年目の女性は、「3年目までがむしろに働いて仕事をしっかり覚えた上で、両立できる働き方をめざそう」と覚悟を決め

て仕事を頑張り、現在は100人いる営業の中でトップの成績を取っている子もいます。しかし、彼女の同期には「この忙しさが一生続くのか」と辞めていった人も多いとのこと。彼女は、インターンシップを通してロールモデルに出会い、今後の人生の見通しをもって職業生活をスタートできて良かったと話してくれました。

その話を聞いて、現在準備しているのが、内定者が同じ会社の先輩宅にインターンシップに入る「内定者インターンプログラム」。いま、どこの会社でも新卒者の早期離職が問題になっていますが、その防止

にも役立つ研修です。ワーキングマザーは職場で「就労時間が短く、楽な働き方をしている人」と思われがちですが、インターンシップでライフの状況が分かり、仕事も子育ても効率化しながら頑張っている姿を見れば、そのイメージも変わる。保育園から「子どもが熱を出した」と電話があっても、若手社員に子どもの面倒を見た経験があれば、「〇〇ちゃんお熱ですか、早く帰ってください。仕事は私がやっつくんで」と言ってくれる。そんな風な社内コミュニティを築いていけたらと思っています。